

バーチャルとの調和

松浦 俊博

最近、AIという言葉が目につく。この言葉は七十年ほど前に使われ始め、流行ったり廃れたりを繰り返してきた。私の職場でも、三十年余り前「エキスパートシステム」というAIが広がるようになった。機械故障の原因と対策を過去の事例から診断するものだが、データが貧弱で使えなかった。

その後、ビッグデータが使えるようになり、自動運転や画像・音声認証や天気予測やロボットなどの分野でAI活用範囲が著しく広がってきた。

最近ではChatGPTなどの生成AIが注目を浴び、結構流行っているようだ。いや、それ以上にフェイクSNSなどに使われて世間を混乱させており、悪用事例のほうで有名になっている。

生成AIも、善用すれば役立つツールのようだ。昨年、娘の研究室で学生が進捗報告に有料の高級な生成AIを使って資料を作成したそうだ。「中身がなくてもそれらしい資料ができるんだね」と感心していた。「重要なポイントはそこじゃない」と指摘したそうだが、そういうことはAIには判断できないのだろう。生成AIの作る文章を見ると、「まずキーワードをビッグデータから探し出してちりばめ、それらをつなぐ言葉をビッグデータから探して挿入する」という手順に見える。

AIの優れた点は、ある手法により導いた結果を評価して、その方法を自己修正することにより最適化を図ることだ。これには、最適化を評価する目標量の設定が必要であり、その設定如何により結果が異なるものになる。さらに、手法には空間と時間の境界条件などの設定が含まれるので、いかに努力しても我々が存在する自然界で生じるリアルを再現することはできない。天気予測で30分前のデータを使った予測は5時間前のデータを使ったデータより精度がいいこともわかりやすい例だろう。つまり、AIを用いて導かれるバーチャルは、限られた仮想の設定条件でのみリアルに近づけるが、再現することはできない。このことを認識したうえでバーチャルを利用したいものだ。

現実的には、航空機や自動車の運転のように、限られた範囲を対象とする問題で素早い対応が迫られる分野には、早期にAIを全面活用してほしいと思う。